

まちと
つながり

Sum¹¹

茨城県
東茨城郡
茨城町

Summer 2020





撮影場所:網掛地区

^{よろず}
万 細波を起こし 地を覆う

^{あまた} 幾多の波 ^{しおめ} 創られる潮目 一つの流となる

^{せいしか} 静夏去り ^{あき} 秋が灯る ^{ここの} 禾すなはち ^{みの} 登る頃

地虫の音 此の流先を指し示す

Sunは 茨城町と ゆるやかにつながる いくつもの縁を

人々の暮らし 情景と共に 綴り伝えていきます

Contents 目次

03 特集一流を追う

09 まちで暮らす人
まちを想う人

15 「強い子」が育つ場所
いばらき少年剣友会

17 連載 マチのケシキ

18 編集室から

茨城県
東茨城郡
茨城町
Sun
Summer 2020



Cover
“載うこと 呼び込むこと”
広浦 大杉神社の祭礼で使われている御面
穏やかな表情の奥に込められた力強さを
眺めていると どんな時世になろうとも
穏やかに過ごすことの大切さを
感じるのではないのでしょうか

涸沼川は笠間市の国見山を水源とし、延長六四.五二キロメートル、流域面積四五八.八平方キロメートルの一級河川である。笠間市国見山中から始まる涸沼川の流れば、城里町から笠間市の中心部を通り、大きくうねりながら南下し茨城町へ。町の中心部を東西に横断し涸沼川と流れ、下流域の大洗町にて那珂川と合流、太平洋へ到達する。

涸沼川と併走するように続く城里町の国道一二三号線を、丘陵地に広がる水田を横目に見ながら国見山を目指す。町道を折れ、水田に入っていくように車を進めると、山へと続く鬱蒼とした林道が現れた。車を止め徒歩で林の奥へ足を進めた。林道入口に掛かる案内板によると、

この林道の奥は水源かん養保安林(水)であり、この山が地域の水資源の確保に「役買」していることが分かる。左奥の茂みから聞こえてくる水の音を聞き逃さないよう、土へ土へ追いかけていく。ほどなくすると辺りは薄暗くなった。見上げると高く伸び

覆われた枝葉で陽の光が遮られている。スマートフォンでGPSは散策開始早々あつげなく遮断され、水の音を頼りに源流を追いかけることになった。

ついで、三時間前まで降り続いた雨を受け、シダの群落には雨露が滴る。道はぬかるみ、所々に倒木があり、崩れ落ちえぐられた岩土の層に、この山の歴史が露出していた。枝葉を伝う雨露は地面へしみ込み、地中を通り抜けにじみ出しているのである。山のあちろちろから水が流れ、一つの流れに取り込まれていく。

湿度が高く額に汗が流れ出したころ、登り始めた林道と分かれるように、水の音が谷の奥から聞こえてくる。林道から逸れ、木々の間から崖を降りていくと、涸沼川の源流と思しき沢が現れた。その沢を登るように入ると、小さな流れにたどり着いた。差し込む木漏れ日に照らされ、透き通るその流れは美しい。思わず手でひとすくいし口に運んでみると、ひんやりと冷たく、実にまるやかな旨味が口の中に広がった。



特集

流を追う

写真・文=竹内慎 構成=石川聖太

笠間市国見山 涸沼川源流。里山からしみ出す水は細く小さな流れとなり多くの支流を取り込み流れていく。

*: 流域保全上重要な地域にある森林の河川への流量調節機能を安定化し、洪水、濁水を緩和したり、各種用水を確保するための森林

良質の水 広がる棚田

源流付近、国見山の裾野に広がる水田。川の流れに沿い、傾斜をうまく利用した棚田となっている。その畔で、年配の農夫がひとり、機械音を山間に轟かせ休みなく草を刈っていた。「うちの米はコシヒカリ。この川の水を引いてるんだからうまい米になるんだよ。この辺は上流だから水がいい。昔はこの川でウナギやドジョウもよく捕れた。今はみないね、田んぼで農薬を使うようになったからかね。」と話す。ウナギやドジョウの少なくなった原因は定かではないが、昔に比べたらお米はより手にしやすくなったとは言える。

流れに沿うように県道一三三号線を下ると、住宅地がちらほら見えてきた。川沿いに建つ家には水辺へ降りる階段があり、川と密接にある暮らしを思わせる。流域に多く点在する橋、水門などは流れを制御し、流れに適応してきた足跡を見ることができた。水は笠間の街を抜け、再び田園の広がる旧岩間町、旧友部町を通り茨城町へ流れていく。



茨城町南栗崎地区。
国見山から始まる流れは、川幅を広げながら緩やかに続いていく。
川の増水時、あえて水に浸るように造られた橋は、人々の暮らしと流れとの共生を物語る。

大洗町 涸沼川河口付近。
朝夕に海から川へ水が逆流する。
山と海、2つの流れを持つ涸沼川は
稀有な存在である。



水は、高いところから低いところへ流れていく。
降り注いだ雨粒が、草木を伝い地中へしみ入り、山から湧き出す。それから幾つもの小さな流れが重なり、やがて一つの大きな流れとなる。その流れは田畑を潤し、人々の暮らしを支え、さまざまな生命を育む涸沼という水の器となり、やがて海へたどり着く。太古の昔、大雨によって氾濫を繰り返した川は作物の育成に適した肥沃な土壌を与えてくれたが、同時に築き上げてきた暮らしを幾度となく押し流してしまっこともあった。

山から涸沼に 涸沼から海に 流れは続いてゆく

水路を整備することで人々は流れを操り、川とともに生きる暮らしを手にした。しかし、それと引き換えに他の生物の暮らしを奪ってきたという事実もある。そのことがめぐり巡って、私たちの暮らしに何らかの作用をしているという関係もある。波打ち際で藻を食べていた可愛らしいオボコも、それより大きな魚や鳥などの捕食者の命をつなぐ貴重な食料であったりもする。オボコにとって捕食者は悪と映るが、一方が正義でもう一方が悪というように都合よくは片づけられない。

月と太陽の引力により潮の満ち引きが起こり、海水と淡水が流れ込むことで、汽水湖として豊かな生態系が築かれた涸沼。この涸沼を出た流れは太平洋へ注ぎ、やがて蒸発して雲となり、その一部は国見山に雨として降り注ぎ、大きな流れとなり再び涸沼へと還ってくる。形を変えながら終わりなく続いていくこの流れは、我々と自然環境を取り囲む相関関係を考える余白を残しながら、これからも廻り続けてゆくのであろう。

川と海命の土壌

茨城町の中央部を横断する流れは、支流の涸沼前川、寛政川を巻き込みながら、涸沼へとたどり着く。この日の涸沼は猛暑。腕や首元に強い日差しが容赦なく照りつける。

水辺で釣り人たちが糸を垂らす。「今日はまだこれだけ。風が強いから糸が流されちゃって」と言いながら釣り上げたセイゴと小さなハゼを見せてくれた。若いカップルは、目の前で捕れたテナガエビを摘んでみせる。

手の届きそうな波打ち際にたゆたうオボコ(ボラの幼魚)の大群を見つけた。こちらが近づけば気配を察し遠ざかり、遠ざかれればまた寄ってくる。この可愛らしい小魚たちにも、自らの身を守る本能が備わっていることに驚く。アオシジメが飛んできて砂浜に止まった。その姿を撮ろうとそと近づいたが全く逃げる気配がない。体温を下げるために水を吸うことに懸命だったのだろう。野良猫もどこからかやってきたが、波に打ち上げられた御馳走は見つからず、

すばしこい小魚には手が届かないと思ったのか、ふらりといなくなった。坐して機会を待つより、棚からの牡丹餅にありつく方が理にかなった行動なのかもしれない。木陰で揺れる湖面を眺めているお婆さん。隣に座って同じ景色を眺めてみた。湖面を吹き抜ける風がなんとも心地よい。

日が傾き始めるころ。涸沼川の下流、大洗町の大貫橋付近には県内外ナンバーの車と最新鋭の釣竿がずらりと並ぶ。満潮により太平洋から涸沼川へ海水が逆流する時間である。「潮の流れとともに海から魚もやってくる。この辺りを行ったり来たりしてるんだらう。去年はウナギがいっぱい釣れたけど今年は少ないね」。ハゼ、スズキ、クロダイ、時期によってサヨリなども釣れるそう。教えてくれたベテランの釣り人は、しなった竿のリールを巻きながら魚と格闘を始めた。竿のしなり方を見ると相当な大物に違いない。先ほどクロダイを釣ったという釣り仲間の助けを得て体長四五センチメートルを超えるエィを釣り上げた。





まちで暮らす人
まちを想う人

— Feeling X Thinking

食で世界を広げ、心豊かに

まちで暮らす人

魚久 久江瑞宏

写真 竹内慎

文 ホセカワリエコ

久江さんは茨城町小鶴地区生まれの三七歳。調理技術専門学校を卒業後、東京の赤坂四川飯店に入社。赤坂勤務の後、四川飯店博多にて副料理長を務める。三年前に町にUターン。現在は、小鶴地区で祖父の代から続く鮮魚店「魚久」にて、中華惣菜や中華ランチを提供しながら新店舗オープンに向け準備中。

迷うことなく料理の世界へ

小さいころは、基本的におとなしいタイプでした。小学校中学年になると、男子はソフトボール、女子はバスケットボールの地区大会があり、半強制的にやらされていました。その後野球が好きになりトルリーグに入団するのですが、六年生のときに辞め、中学校でまた野球を再開(笑)。結局中学でも真面目に取り組みず、成長しませんでした。高校生になると、今度は本気で野球に取り組みました。入った高校が強豪校だったんです。でも本気になったのが遅く、レギュラーになれないのは分かっていて。ただ、やり遂げたいという気持ちで最後まで頑張りました。部活以外ではよく漫画を読み、料理漫画が原作のドラマ「将太の寿司」や「味いちもんめ」などを見ていました。親の仕事の影響もあったと思いますが、料理関係に進みたいと考えていたんです。高校卒業後は、父が調理技術専門学校を出ていたこともあり、自然な流れで同じ学校に進むことになりました。

当時ファミリーレストランでアルバイトをしていたのですが、そこで働くうちに中華に興味を持ち、麻婆豆腐を好きになりました。それがこの世界に入るきっかけになったんです。「麻婆豆腐が一番おいしいお店はどこなんだろう、そこで働きたい」と調べると、あの陳建一さんの赤坂四川飯店にたどり着きました。その後、赤坂四川飯店へ職場体験を申し込むのですが、直接フロントの人に電話をしてしまい、事務所にかけ直してと言われたりしながら、なんとか職場体験が決まりました。今ほどインターネットで情報を得ることもできない中、紹介状もなく自分で調べ、電話をして行くという…今振り返ると道場

破りのような気持ちでした(笑)。ずっとこの町で育ってきた僕にとつて、この一連の行動はかなりのチャレンジでした。

そして念願のお店で働くことが決まり、東京の赤坂四川飯店で七年、福岡の四川飯店博多で副料理長として六年働きました。その間、個人で中国料理のコンクールにも挑戦しました。若いころは見せる

ことばかり考えていたせい、なかなか本選までたどり着けなくて。続けていると経験年数とともに技術が身につく、心に余裕もできたせい、世界大会で日本代表になるほか、全日本中国料理コンクールで金賞を受賞することができました。自分で考えたアイデアを形にできるようになっていたんです。

自分の町でお店を開くこと

赤坂時代の先輩がすでに独立し、博多でお店を始めていたのですが、博多への異動を機にその先輩と再会し、話をする機会が増え影響を受けました。いずれは地元に戻ることを考えてはいましたが、結婚して子どもができれば、お店を開きたい、という想いがより強くなってきました。家業を継ぐつもりはありませんでした。料理人になる、ということは、形は違っても、家業を継ぐことと自分の中で解釈し、お店を続けていければと思っていたんです。そして三年前に退社し、町に戻ってきました。

当初、今のお店に向かいに新店舗を考えていたのですが、帰って二日目に



道路拡張の話が出るという予想外の展開(笑)。頭を切り替え、まずは自分の料理をPRしていくことを考えました。魚久ではお惣菜も販売しているのですが、そこに中華のお惣菜を出し、味を知ってもらおうことから始め、その後宴会場として使用している離れで、週二回の中華ランチを開始。SNSでの発信や口コミで知ったお客さんが少しずつ来てくれるようになりました。魚屋で中華というギャップも、お客さんがおもしろがって投稿してくれるんです。

新型コロナウィルスの影響もあり、今年の新店舗オープンには難しくなっていました。来年にはお店を構えるつもりです。お店の場所については、やっぱり自分の町がいいという想いがあり、町内というのは変わらずですが、小鶴地区というのは父の意見を尊重して決めました。ここでは自分のペースで落ちていく料理と向き合える反面、以前の職場のように身近に一流の料理人がいる環境とは異なるので、自分を律しないとな、と気を引き締めています。

豊かさを生み出す食

この町で暮らしていたころを振り返ると、僕は食を知る機会が少なかったと思うんです。世の中には多種多様な食文化があります。さまざまな食を知ることが驚いたり、喜んだり、楽しんだり、世界が広がると思うんです。厚かましいですが、自分が経験してきたことを感じてもらえるような、そして食で心を豊かにしてもらえそうな、そんなお店をつくれたらと考えています。

再び町で暮らし始めて思うのは、やっぱり一番落ち着くのはここだということ。そして何もないということ(笑)。でも一度町の外に出たら分かんと思うんです。町には誇れるものがあるのに、気づいていないだけだということ。もっと個性を出して宣伝の仕方を上手くしていくということも必要かと思っています。そして、これからは自分たちの世代が町の誇れるものを創っていくかなければいけないと思っています。



地、人ともにある形

まちを想う人
建築家 齋田武亨
写真 アラタケンジ 文 二川ナオミ



魚久
茨城町小鶴1240-1 029-292-0119
Twitter @uokyumabo

齋田さんは茨城町前田地区生まれの四〇歳。大学院修了後、隈研吾建築都市設計事務所に入社。富山県富山市の複合再開発ビル「TOYAMAキラリ」の設計に携わったことをきっかけに富山県に移住。東京に拠点を持つパートナーとともに一地域で活動を展開する「本瀬齋田建築設計事務所」を共同主宰。

原点は崖下の秘密基地

僕が建築の道に進んだ原体験には、茨城町で過ごした子ども時代の秘密基地づくりがあるように思います。友達数人と近所の崖で穴を掘ったり石を積んだりしてよく秘密基地を作って遊んでいました。中学の文化祭では堅穴式住居を作って発表しましたし、もともと、頭の中にあるイメージを形にするのが好きだったのかもしれない。とはいえ、当時は大人になって建築家になるとは思っていませんでした。幼稚園のころから習っていた剣道では全国二位になったこともあったので、将来は剣道の先生にでもなるのかな、と考えるくらいでした。しかし中学三年生のころ、病気で一年半ほど運動ができなくなってしまう、高校で剣道を再開したのですが、とても続けられる状態ではなくて。進路を考えるときに、好きだからという理由でそのまま建築学科のある大学へ進学しました。入学してしばらくは建築について深く考えず普通に勉強していました。朝が強いほうではなかったもので(笑)、四年に上がるタイミングで単位が足りず一年留年することになってしまい：暇にしても仕方ないと思い、行きたかった研究室の授業を聴講したり、先輩から紹介された建築事務所でアルバイトをしたりしていました。大学の先生から「建築の見方をとにかく広げる」「地域性をデザインに取り入れる」という考え方を学び、アルバイトで実務経験を積んだこの時期のおかげで建築の楽しさを知り、本気で志そうと考えられるようになりました。このときのアルバイト先というのが、僕の勤め先にもなった「隈研吾建築都市設計事務所(以降隈事務所)でした。

この場所で仕事がしたい

隈さんは木材とか素材にこだわる優しい印象の意匠が目立っていますが、建物が周りの地面とどうか、場所に対してどのように建っているかという部分がとても上手い作品が多く、僕はどちらかというとそういう部分に惹かれていました。作品ごとにどんな雰囲気が変わっていくのですが、コンセプトはとてもしっかりしていて、なぜそのデザインに至ったのかきちんと説明できるんですよ。事務所メンバーは皆隈さんを尊敬し慕っていました。チームワークも良く、皆がやる気を持って取り組める職場でした。当時は仕事が好きで、休日も職場に行っていましたね(笑)。隈事務所時代は、全国各地にある担当現場と東京の事務所を行き来する生活を送っていました。

そんな僕が富山に移住するきっかけになったのは、富山県富山市の複合再開発ビル「TOYAMAキラリ」でした。ほかの案件と同様に初めのうちは東京から通っていたのですが、大きな案件でしたし、腰を据えて仕事に取り組みたかったので、富山に家を借り、単身赴任という形をとるようになりました。このプロジェクトでは富山市民と共同で考える部分もあり、次第に地元の方々と打ち解けるようになりました。週末には知り合った友人たちと交流することも多くなり、夏は仲間でバーベキューをしたり、冬は有志で巨大なまくらを作ったりと、北陸特有の気候風土の楽しみ方を教えていただいたように思います。その中で、魅力的な方々との出会いがあり、次第に独立したらここで仕事がしたい、と思うよう



2020年12月オープン予定「レヴォ」。レストラン他宿泊棟やパン工房、菜園などを有するオーベルジュ。

になりました。その後十年勤めた隈事務所から独立し、妻と共同で本瀬齋田建築設計事務所(以降サモアーキ)を設立しました。サモアーキは妻が担当する東京事務所と、僕が担当する富山事務所の二地域拠点の形をとっています。

人がつなぐ地方の仕事

事務所を開いて五年になりますが、富山事務所の仕事は知り合いの知り合いだったり、こちらで仲良くなった方々が運んで来てくださることが多いように思います。今建設中の案件、南砺市の山奥の利賀村(おんがむら)にあるオーベルジュも人伝てによる依頼から始まりました。施主の谷口英司(あきし)さんは地元でも有名なミシユラン一つ星のフレンチレストランのシェフで、ご自身が理想とするオーベルジュの設計を依頼する建築家を探していたところ、隈さんと知り合いたという知人伝いに僕のことを知り、お声がけくださったそうです。今の事務所を借りているビルのオーナーや雑貨屋の店主など地元の方々のお世話になることも少なくありません。人と人とが繋がりがやすい土地柄なのかもしれませんね。

故郷を想う

今年はいばらき幼稚園の建て替えに伴う設計を引き受けています。予定地の地形を生かしつつ、子どもたちが走りまわれるような大きな廊下と広い園庭のある幼稚園を提案しています。地元に戻ると改めて感じるのですが、茨城町は平坦なようで高低差があったり、平地林が多かったり景観的に豊かだと感じています。地方が抱える課題にはいろいろあると思うのですが、建築の視点から景観やまちづくりを考えた場合、何かを一から新しくするだけが建築デザインではないと思っています。公園のベンチだったり、公共施設の正面だったり、建築未満のところから普段の景観やまちの活動を応援することもできると考えています。故郷にもっと建築をうまく使える場が増えたらいいなと感じています。

夕方、剣道着の子どもたちが一人、また一人、静かだった道場はいつの間にか賑やかな声に満たされていきます。準備運動の号令とともに、ざわついていた館内が徐々に静まり、子どもたちの緊張と集中が空間全体に広がります。幼稚園児から高校生が切磋琢磨する、名門、いばらき少年剣友会を訪ねました。

始まりは幼稚園のホールから

現いばらき幼稚園の理事長であり道場の館長である雨谷益水さんは、大学卒業後に実家の経営する幼稚園を継ぐため茨城町へ帰ってきました。道場を開くきっかけは、町体育大会の剣道の部出場を目標に、園児たちを募り稽古を始めたことでした。当初、今のような道場はなく稽古場としていた幼稚園のホールの床は傷み、ガラスは割れ、気苦労も絶えませんでした。しかし、一生懸命についてくる子どもたちの姿を嬉しく思い指導の奥深さを感じたそうです。その後「どうせやるなら日本一！」と一念発起し、本腰を入れて稽古をするために、いばらき少年剣友会を設立しました。厳しい稽古に弱音を吐きながらも懸命についてくる子どもたちやその親御さんたちと、時にぶつかり励まされながら、設立八年目で小学生の部全国優勝となりました。それから約四〇年、全国優勝十四回を数え、今では全国規模の大会の常連となり、名実ともに名門と言える道場に成長しました。

父から子へ

現在、道場の指導は益水さんの息子さんたちが協力して担っています。道場を主に引つ張る四男水紀さんは「父の時代は見学に来た子が怖気付いてしまうほどの厳しい稽古が当たり前でしたが、今は時代に合った指導が求められ、昔のような指導は難しくなっています。長所を伸ばす教育に重点が置かれ、短所に向き合う機会が昔よりも減っているように思います。結果が出せなければ努力しても意味がないという成果主義の価値観も広がり、子どもたちにとって大変な時代になってきています。この道場に通う子どもたちには、剣道を通して、勝つばかりではなく自身の短所に向き合い、努力し、少しのことではへこたれない、人間的な強さを身につけて欲しいと思っています」と語ります。

戻ってくる場所

「ひよ」とすると、私が教える子たちと過ごした時間を切り取れば、彼らの両親以上に一緒に時間を過ごしてきたのかもしれない。今でも年に二回くらい、ここを巣立った教える子たちに連絡を取っています。昔はハガキでしたが、近頃はラインを使っています(笑)。コロナでなかなか集まることも難しくなっていますが、例年集まる機会を設けています。月に一度、地元に残った教える子たちと稽古もしていますし、地元を離れた教える子たちも帰省する度に顔を見せにきてくれます。この幼稚園で働く保育士の中にも教える子がいますし、来年新築する新しい幼稚園の建物は、教える子とその奥さんが設計しています」と益水さんは嬉しそうに語ります。いばらき少年剣友会は心の強い子を育てる場所であり、彼らが帰る場所でもあるようです。



いばらき少年剣友会
強し子が育つ場所

写真=竹内慎 文=二川ナオミ



4年目を迎えた「いば3」の「次の一手」がスタート!!!

茨城町を知ってほしい!好きになってほしい!!
 という気持ちから、2017年にスタートした「いば3」。
 設立4年目を迎え、いば3のコンセプトである
 「開こう、つながりのとびら」とおりに
 ゆるやかなつながりが広がっています。
 そんないば3らしい「次の一手」が
 いよいよ始まります…!
 詳細は追ってお知らせします。
 お楽しみに!!!

From Sun -編集室から-

Sun 第11号をお届けします。

今回の取材で酒沼の源流を初めてしっかり調べました。せっかくなので、今度は知るだけでなく自転車で源流まで行って実際に触れてみたいになりました。[ひで③] / 人生の「流れ」もさまざまな人との因果の連鎖だと思います。今の「流れ」を大切に生きていきます。[KABA3] / 身近な酒沼ですが、今回の取材により、酒沼川の流れの中にあるダイナミックな酒沼の姿をとらえることができました。一度離れて見てみると、その良さがより分かるのは、ふるさとを旅立った人の人生にも通じると思いました。[内3] / 川の流れを見ていると、反射する陽の光や、晴れの日に映り込む空の青さ、夕焼けで赤く染まる水など、日々さまざまな姿を見せてくれます。遠出が難しい今、身近な場所でお気に入りの景色の変化を楽しむのもいいものですよ。[がっき-3] / 水・風・季節・人の記憶…さまざまなことが各々の速さで流れていきます。流れを追い、気づけはずっと遠くまで運ばれていた、なんてことも案外少くないのかもしれないかもしれません。今号の取材でそんな気分させられました。

[YANNA3]

紙面に載せきれなかった写真、取材のお話など、いば3オフィシャルWEBサイトにUPしています。

いば3ふるさとサポーターズクラブ オフィシャルWEBサイト town.ibaraki.lg.jp/iba3

次号は、2021年3月発行予定です。

Sun 第11号 夏号 2020年9月15日発行

企画・発行: いば3ふるさとサポーターズクラブ事務局
 [茨城町 町長公室 秘書広聴課]
 〒311-3192 茨城県東茨城郡茨城町小堤1080
 TEL: 029-240-7148 MAIL: iba3@town.ibaraki.lg.jp

編集・アートディレクション・デザイン | i,D
 取材・執筆 | 竹内慎 二川ナオミ ホシカワリエコ 石川聖太
 写真 | 竹内慎 アラタケンジ 絵 | やまなかもこ
 印刷・製本 | 株式会社光和印刷
 本誌内容の無断転記、記載、複写を禁じます。 ©Sun all rights reserved.

Special Thanks 【順不同】
 外岡正一さん 川又豊彦さん いば3幼稚園



お申し込みはこちらから
town.ibaraki.lg.jp/iba3

“いば3”ではサポーターを募集しています!!

“いば3ふるさとサポーターズクラブ”はいば3まちがつくるあたらしくてゆるやかなつながりの場。
 設立から4年目を迎え、会員数は850名を突破!ますます盛り上がる“いば3”とみんなであつなろう!!!



いば3 WEBサイト

絵:やまなかもこ

画家。絵本作家。女子美術大学卒。
 絵本や挿絵を中心に創作活動を行っている。
 主な作品に「田んぼのいのち」(くもん出版)、
 「億万智3・11短歌集 あれから」(今人舎)など。
momokomo.net

お囃子に合わせ、楽しげに舞う姿を見ることで疫病だけでなく、人々の鬱屈とした気持ちも破っていたのかもしれない。



*:天然痘。天然痘ウイルスを病原体とする感染症。1970年代後半に根絶に成功した。

連載

マチのケシキ



第11回 禍穢いと安婆嶋

絵 | やまなかもこ 文 | 石川聖太

昨今の感染症の影響で、全国的に夏のイベントも軒並み行われず、いつになく静かな夏を迎えています。
 例年なら七月の後半、夕暮れ時の酒沼湖畔を歩くと、湖上に浮かぶ複数の船からお囃子が微かに聞こえてきます。下石崎地区で続く、あんば祭りは祭りのです。下石崎地区で疱瘡が流行した際に、桜川村(現稲敷市)の大杉神社の分霊を祀ったことが始まりとされています。大杉神社は古くから航海、漁労の守護神、疫病や疱瘡防ぎに利益があるといわれ、東北や関東を中心に信仰が流行したそうです。

病の流行の兆しがあると、人々は神社に祀られている天狗などの面を被り、鉦や太鼓などを鳴らし悪疫退散を祈って、集落や村を廻りました。これがお囃子の始まりとなったそうです。
 長年に渡り続いてきたあんば祭りも、今年の開催は見送られたそうです。お祭りは地域の人々が一同に集う機会。確かに開催は難しくなったと思います。しかし、自粛続きで人々の気持ちがふさがちなこんなときだからこそ、疫病や悪魔を祓うお囃子が聞こえる必要があるのでは、と思うのです。全国各地に再び楽しげなお囃子が聞こえる日が来ることを、切に願っています。



Sun

茨城町は 北緯36度17分 東経140度25分
茨城県のほぼ中央部に位置します
日本有数の汽水湖である濁沼を湛え
豊富な水と里山に育まれた風土です